想丝菴聞奇集

壹

三三八

蔡張黃陶童樂

想山著聞奇集序

日月星辰晝夜晦明造次顛沛天下之人仰觀而俯察焉而至其不測之變則或昧焉山川草木鳥獸與魚跋涉往還視聽而畜養焉而至其不測之化則或惑焉佛神感格善惡報應華竺經傳紀述而賛揚焉而至其不測之應則或疑焉蓋疑者其知識之劣也惑者其視聽之狹也

昧者其問学之淺也三毋想山篤學而博涉性敏而善書夫書之為道也摹範天地陰陽以傳造化不測之秘乃在自己神腕之間故至事物休咎因果報應之迹無有不寸管一揮掌握其覇柄者謂出其優遊漁獵硯山墨海之餘力而然者非哉今方統其所纂迹之異聞奇觀數百千條之中特抄録核實著明而近人情者為五

十卷題曰著聞奇集〻成請序〻余〻告想山曰
佳矣此篇隨聞隨筆故不緣飾文之浮華靡
麗之態倣章實達意之法而天地之恢宏萬物
之繁衍報應之微密莫不細論詮考纖悉著明
矣莫道俚語猥駁蕪辭冗長不足采觀焉世人
因以擴充其見聞覺知則昧者明矣惑者決矣
疑者信矣善哉想山不啻筆鋒入于木著書亦
上梓自非學識老錬詎得能然耶每事輯録絲
解縷折似微而著然則其題之於著聞名固不
空或曰想山腕力有神此篇總括造化奇機遊
戲書道三昧者豈不其然哉豈不其然哉

嘉永二年歳次己酉嘉平月

方外子無黨社主僧允識

近世新編諸家著述多有
之然而各説紛紜莫一
時之耳目矣況和山其守家
研究之功物性記氏名實之説
勤而又強著好誠發不已
仁義之教訓忘寡而怪乱地妖等
之無援而支者其分者亦是和学
教之概不補某因重此事以
室清序之責云
嘉永己酉孟夏
尾張　佐々木庸綱撰

清水家藏書

凡例

予若年より国而見る所の事態万神教の義条々
ゆゑ然るべきことを年月を経るに従ひ次第に
忘却し記臆宣敷臆断に属煩も故に脳海を顧み
如何相成べき筆記明白至極なる事なれ同友の意
若まゝ思ひ而已なるべきを又人々勿謂
今日不学而有来日勿謂今年不学而有来年日月
逝矣歳不我延嗚呼老矣是誰之愆と吉人の誡もを
僅に混りを鑑とし〳〵混りの為に寝食となるも
固と誤り多し〳〵去ら乙未年乃秋頻りに思ひ立年漢
雑漢秘談深秘法乃四条〳〵て書記す一冊を
但草稿なれ漸五十巻よりなるべし同志の人〳〵

右草稿を閲して粗書ハ国窓乃眠と見人を而已ゆ恐ど
童蒙又を愚夫愚婦と善道へいざなひ教化のもゆ
ぬもバ校訂〳〵同友よ示もべ〳〵いのぶちに勧
らるゝふまゝせず帳よ活ひ追〳〵校訂すして御りと
置ぬ

一人乃話を世に正説也〳〵ゝを十ゆ七八迄ハ活傳人の遠ひ
又を世乳遠ひ乃混淆と思へ引も多〳〵或ハ是ら或
話〳〵も貫尾連綴せ〳〵て筆記明雑ゝを
あ〳〵ゝ外奇なる事を如ある乃世俗乃常あもで
弥矣と信るゆ矢吾と双〳〵面白〳〵信りゆ長爲ゆ
ゆりてハ歴を添〳〵者〳〵事の相ゆ言傳る族もをバ
貴ふ弥捨ゝ乃爲徒り実事にれ遠のゝと思ひて

記録せしハ十が一なりとゝ雖の一ふしと前尾不変の事
又ゝ十ゝに貫ゝ為ゝ事ゝとゝ雖ゝ粉冥事ゝお遠
の事ゝと知るべし古人ゝ文ゝと厚ゝ記し亟ゝして
勧善懲悪ゝも誠ゝ潭ゝ情ゝ湯ゝ減ゝ切せも
知るべし又意ゝ教誡の意ゝ深ゝ誠ゝ事ゝそも
傳ゝ之ゝ深ゝ事ゝと思ゝて記ゝて後世へ
伝ゝざるも多ゝ伝ゝ事ゝと思ゝる小説のゝ
なるゝ類ハ愛ゝと思ゝて記さゝ後世へ伝ゝ
ざるゝ類ハ愛ゝ記亟ゝ伝ゝるゝよゝ
ゝ端ゝと考ゝるに記ゝ亟なゝ用捨ハ見るゝの
んゝ所ゝ或ゝ又後年ゝと亟ゝの事ゝの出来ゝ
断ゝ後ゝ証ゝ拠ゝと有べゝ記ゝ亟ゝや勝ゝん

ゝ斯ゝ記ゝ得ゝり

一 柳亭未曾兵衛ゝ伝ゝ作ゝ作ハ一代の心ゝ有事ゝ性ゝ亟ゝ
霊験幸怪ハ自然の徴ゝ表ゝ出ゝ来ゝ事
なゝ故ゝ以霊怪と見ゝ疑ゝる人多ゝ更ゝ
言ゝ人ゝ又不思議と云ゝ能感伏なゝ幽明
三世の理ゝ悟ゝ人ゝ所ゝ尤ゝ怪異ゝ又道理
ゝ事ゝ畢ゝ計ゝ難ゝ事ゝ和ゝ編ゝ事ゝ多
ゝ可ゝ慎ゝ事ゝ人ゝ髭ゝ事ゝ
ゝ世ゝ虚ゝ
ゝ作ゝ意ゝ
ゝるのゝ異ゝも唯ゝ篇ハ皆ゝ而見ゝ所の遠ハゝ
事ゝ思ゝ
ゝ書ゝ思ハ
一 ゝ書ゝ思ハ

業記を見るまゝに記し置き多く閑々時代前後を
わづず混乱して詩より小説年來書置くるとあ後不
次第に綴りよせ冊子となしうる迄元來此書ハ
勧善懲悪の為の因縁より而已ホさん〳〵思ひおこし
筆記ばかりなり去るに仍〳〵此書の文辞ハ古今
著聞集を擬し書うるゆゑ此ぶ又新著聞集より
仍を〳〵書あつめ此ぶ素より文拙とこゞさて
筆せしも此ぶ唯俗通而已と思ひ〳〵深く意を
加へず時より活ひ筆り組せ〳〵書集置くる迄の事
なれ故〳〵著述せしに此書に此ぶ故をん勿論
博識の君よりホとべつさ書より此ぶ之バ文面ホ出
拙さを笑ひ給ひ事ハ

一此書ハ元來一ッとして虚説と思ひハ書載ぶ〳〵べ
物事形に嘘と云へよ〳〵ぶ或ハ誣説事又ハ実事也
ゆゑ〳〵云置ハ物更其事ハ事ちゝざると不ホさん為
なり且又話ハ義理節道ハ外情態ゆよ初ふまで
煩雑を厭ふべき俗り書記せ〳〵ハ事実の貫ぬを
事ハ発憤心之ゆ〳〵副催重復と首〳〵事ハ
今ハ普通りよ成居ふる事或ハ古人の筆記成置ふる
ものゝ又ハ受傳え置ふる話ハ今是と取意所ハ
抄んと欲ども如何ともなりがたき事ハ捨て
誌さざる方まさるべくもとゞ事を厭ひ〳〵ゆゑ
話ハ支離りよ消失せんを恐り多く〳〵書記しるも
まく首見る人ゝ心〳〵の人

一此書後の一事〳〵と意の乃び文を行正しあり事實入り麤略せざる板り記一亟たり他もでも事多端〳〵理を又極りなるもバも事実遠ひ居る事を省べ〳〵是ホの分を自余の条り及ぼ〳〵考〳〵ようたらぬと皆むまじ

一世俗の口碑ハ悉〳〵證〳〵もるよ是ととも云雑う朝りもとも〳〵野よ形むし〳〵も〳〵人を農夫名る乃茶吾俗〳〵〳〵ふ中よ採用もべき事かうべきバ史ホの事をも伝よ記一亟ぬ免角此書ハ自意を加へ〳〵人の咄よ任せ〳〵有の侭よ記をを事一とし人の〳〵田夫野人の鄙俗をも遠りぬ板よ書形を切〳〵主意〳〵

一人名地名ホを記もに勢華〳〵て多り篇る分又ん事人共名乃西象ホを居るをも或人又ハ何某或ハ某乃村など〳〵記一亟るを有且文字乃ホを篇ハうか文字り〳〵記一亟ホを是固推乃たびと恐かホを〳〵り

一江戸ハ尾陽乃產故郷中に我云〳〵と書亟るハ〳〵か事國の事ハり中年と後東都り住とる事又一故を江戸乃事を又多一の〳〵國を為ホ〳〵て亟よ地名を云ホの ハ皆江戸乃事なり

一江戸ハ世學義見博〳〵書を見ホ〳〵バ先人の論説ホ有事を共一ど又右東国板乃浅有事ホも知兼う御代遍見人及ぶるをハ事似ホを挙〳〵後進よ伝ホを

ゆり且東遊記西遊記又ハ著聞集の類ハ人々の座右に有〳〵如所の書のまゝ〳〵童蒙の為に安きやうに書なし一冊毎に有る〳〵意を加へ分ち〳〵

一

物語中に記臆する奇談雜談おのゝ〳〵日々に聞く所の事柄に涉りまゝ〳〵ハ己が為に書記すと雖〳〵思へ〳〵も勢の除帳多〳〵ゆゑ自己の備事又多忙なるに〳〵外に志して道もなて此冊の毛筆ハ文に遑〳〵〳〵なれども又予が癖に〳〵思ひとゞめ難〳〵嗤笑を己り彩るも不謂因縁なれば〳〵

嘉永二年己酉春　想山齋主人誌

作靈験神異の事ハ恐多〳〵も太神宮の御蔭奉り代一条より〳〵御幣を授の諸國へ流〳〵せの人家加護〳〵の奇端ハ中〳〵もの〳〵旦國〳〵の人民挙〳〵来信す〳〵人氣の事ゆゑ〳〵接待旅宿おとゝのせ〳〵奇談おとゝ〳〵丈巻〳〵集録し〳〵是を幸読の巻首〳〵て五巻〳〵の目ひ付まゝ〳〵思ハ五冊有〳〵右の五巻を使の〳〵ゝ本うきゞや〳〵皆開きこゝびハ其次冊の方より新上木なり〳〵

庚戌孟春　青山直意

想山著聞奇集巻の壱

目録

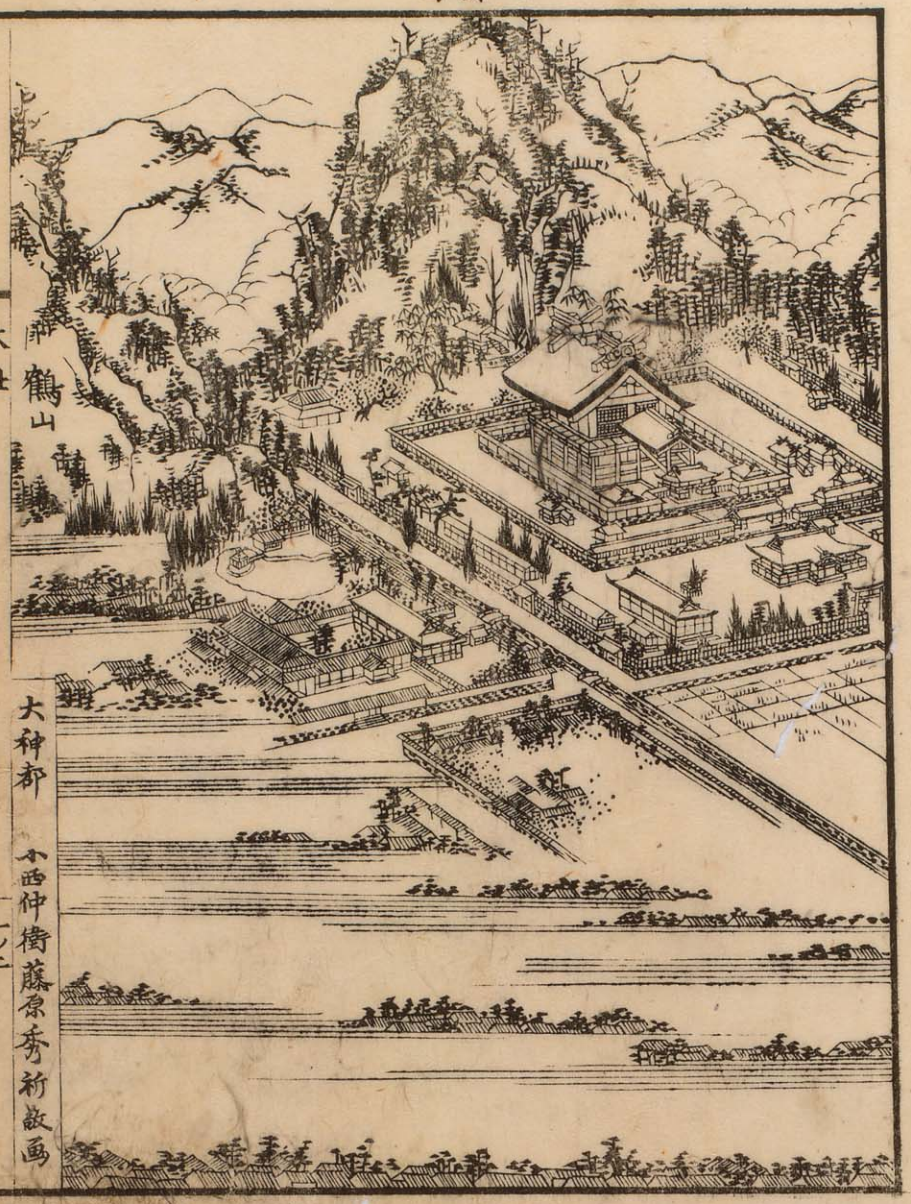
一 出雲大社遷宮の時雲出る事
一 天狗の仕業 附 物實鰐の事
一 鏡奥〳〵石付うつる異奥の事
一 蛸薬師霊験の事
一 頼馬の事
一 菖蒲の根奥〳〵化もする事
一 毛の降もする事
一 白蛇霊異を顕〳〵する事
一 狐の行列兵鼓をたゝくする事
附 犬を焼もく事

一 人の金を掠れ取る賊の魂にせめ殺さるゝ事
附 出ざるひの事
一 吉夢凶夢を顕もく事

出雲大社遷宮の時雲出る事

出雲の國の大社は古昔より甲子の年とん遷宮成る事にて大社の宮大工神門順次進云人長命まで寛政の末の頃は八十一歳にて身まかりし由此人はなしの語り曰此大御社の遷宮にて古より八雲山の白雲艶麗出て渡御を蔭へ奉り齊端を皆人拝み奉る事にて手を延享の遷宮より眼前拝み奉り事此度今は其端を拝み奉りしを幸にかりぬ程遠長命にて願ひて二度神端を拝み奉り度其丈夫御まぐり命を拝ぐ人度の地にて云にはどきみ

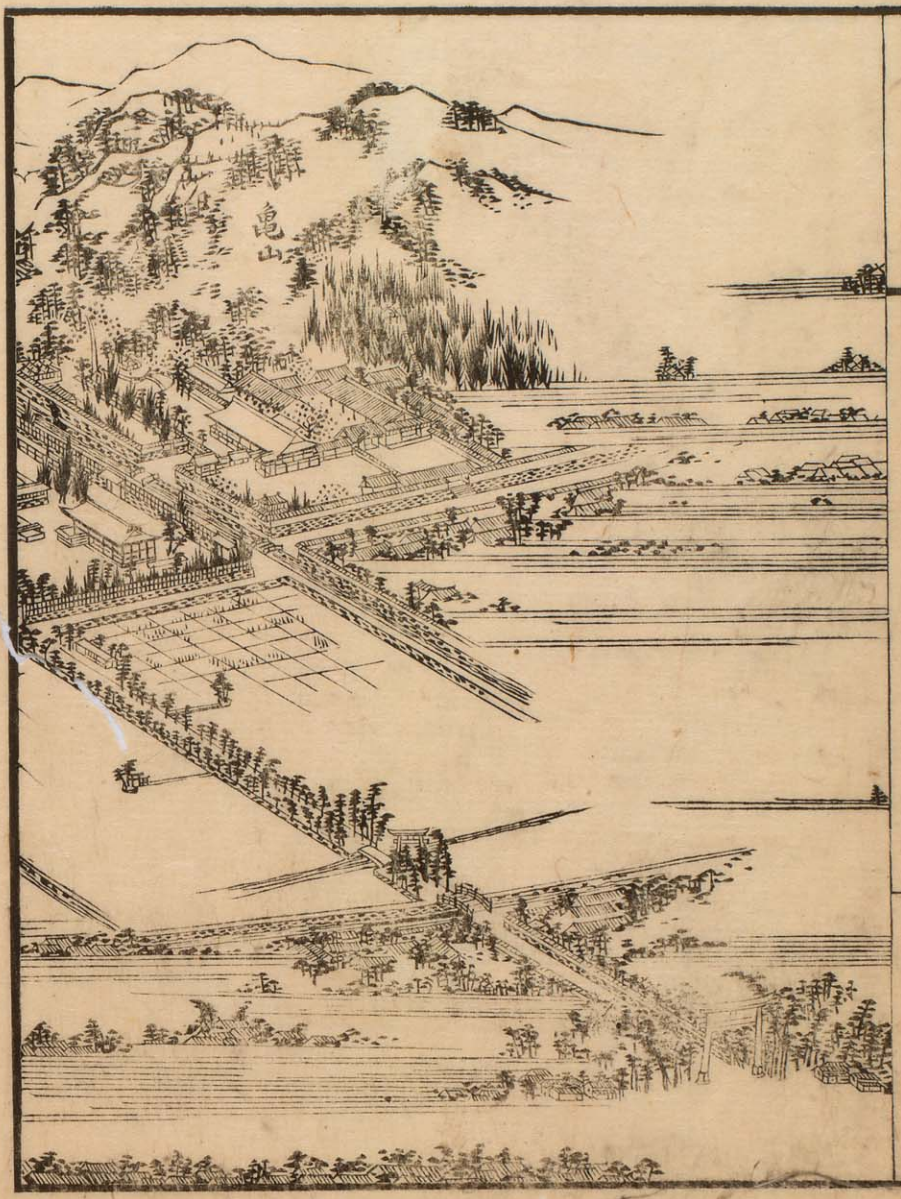
うを祖父の常に示しの人は此神端は語り傳へると哭イと大り事聞り去て拝み奉りて後始



大社

大神都

小西仲樹藤原秀祈敬画



大社

神明の縁〻なるをもて所り奉へ以大神神の靈福自餘の神神と別なるをもて知明らむべしと宣へり奥よさらに事ゝ再手ぶりをもて今の人〻は最早祝をもてむで遷宮と称み奉りもて後手ぶ言の遠はざると知所〻との〻語りしとぞ

遷宮は直に進ハ遠よ事なの遷宮よ意なりで没せしハあり 起文化元年ハ甲子なり是遷宮先〻国六年に当よ

神殿造営出来〻七月廿一日の夜よハ遷宮者所〻と聞き渡り古の遷宮よりハ変〻雨の降ざらに事と中停ふまじと祈所祝ハ雨天のこと〻ハ何あんと神祇の人〻思へるに〻ひ〻よ其日りの及び〻速よ雨と心雲と霽〻所〻一天曇りなく清渡りくもバ人〻勇ミ進〻清設事事ハ〻なりその

刻の面ふと侍り〳〵と我
（運賀の刻ハ夜の九つ也　回例〳〵）
心〳〵ふの刻
ゝもゆび〳〵ゝハ其間亥なり〳〵ゝ人〳〵ゝ集ハんとせ〳〵
折ゝハ雲山の峯より傘程の白雲出さり是ハ彼岐
ゆび〳〵ハ雲の立さる事端〳〵ん〳〵人〳〵悉〳〵頭伏
拝〳〵是を見るゝ〳〵続〳〵左の方ゝ又一むら雲立と
見へふうちに右の方ゝ同様ゝ又白雲一重生出〳〵
三国雲〳〵と忽ち方へ飛〳〵ゝ去ゝ月新り〳〵〳〵見
ゆふやゝ白雲ゝ〳〵一面ゝ地ゝ覆〳〵渡御の〳〵ゝ
神殿仮殿ハさ〳〵〳〵ゝ出造ゝ結其外社家の座の間ゝ
動るまで〳〵ゝ雲立ゝ〳〵ゝ白雲〳〵〳〵ゝ神輿と覆ハ渡御
と拝〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ人〳〵ゝ良久〳〵ゝ渡御〳〵に
雲消月輝〳〵〳〵西山へ傾き居ゝ〳〵ゝ初の如く現顕の
神霊なるべ〳〵ゝ古ゝ〳〵ゝ語り伝へるの〳〵ゝ感涙せ〳〵
回記ゝ見ゝ〳〵〳〵ゝ〳〵ゝ眼前拝〳〵ゝ〳〵ゝ人今ゝ忘ゝ
侍〳〵ゝ社家何ゝの出〳〵ゝ具ゝ聞〳〵ゝ記〳〵ゝ
山雲ゝ出ふゝ〳〵ゝ出雲〳〵ゝ国名ゝ記〳〵ゝ素盞嗚尊の
八雲立の神詠〳〵ゝ山の事也ゝ代ゝ東の回記の
事ハ博識〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ賛せ〳〵ゝ唯感〳〵ゝ
記〳〵ゝ

業〳〵ゝ黄帝〳〵ゝ位ゝ登〳〵ゝ紫雲殿ゝ
〳〵ゝ端ゝ那せ〳〵ゝ雲ゝ宮ゝ作〳〵ゝ又雲ゝ
造〳〵ゝ事回記ゝ者〳〵ゝ人ゝ〳〵ゝ事ゝ〳〵ゝ
上古ゝ事ゝ故虚〳〵ゝ〳〵ゝ人〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ人〳〵
〳〵ゝ又不思議〳〵ゝ〳〵ゝ人〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ゝ

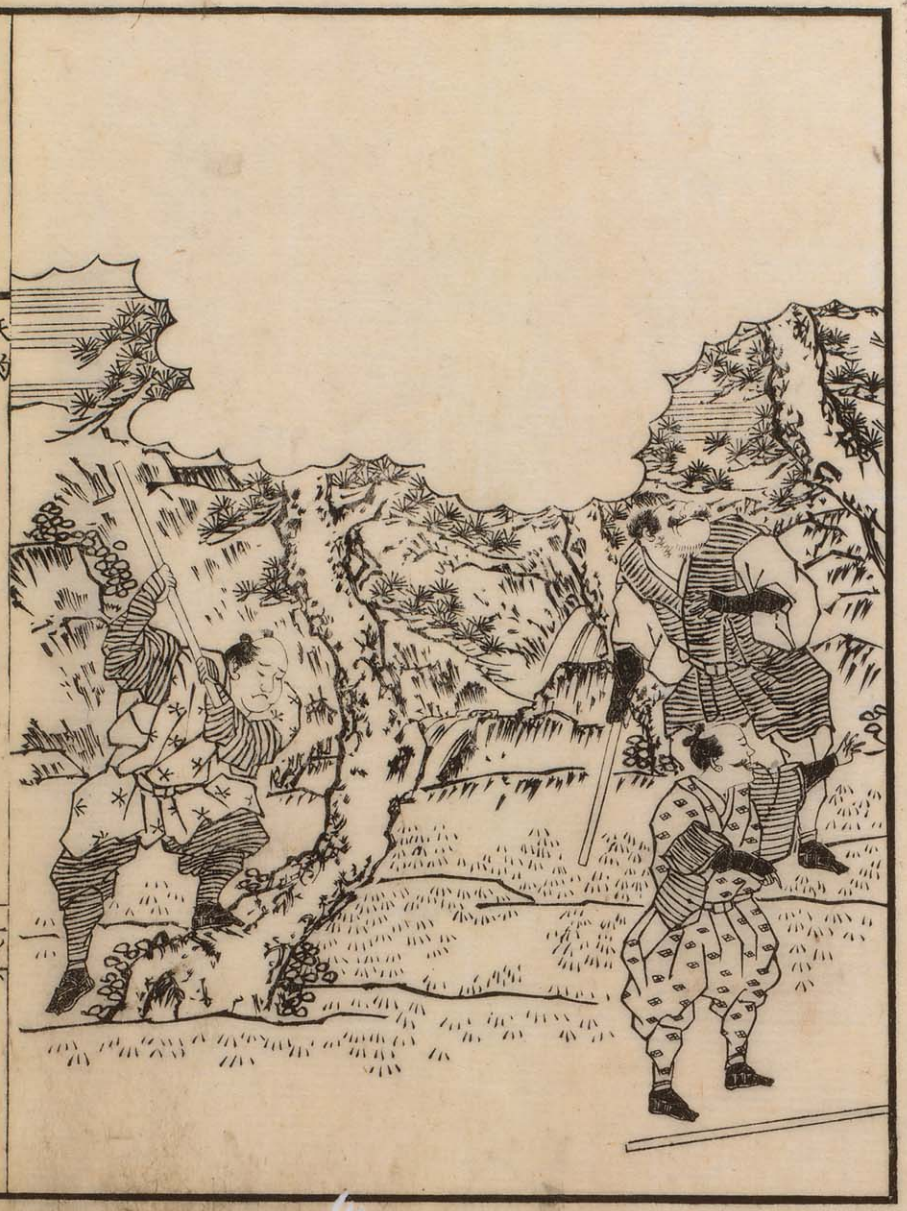
無ざるの事なり毛本文に云所と和漢同侯と云つべし
は將造りの書と雲書と云又爾あるは故畜雲書
と云〻古聖の他法現り爾道に傳来せり
世畜雲り治雲豊雲屋雲貴雲穀雲或は宗白
黒赤の差別有〻秘傳と〻道り傳はかの御社
の雲と時り青〻色〻の差別をもあるべき神慶
の霊應は人智をはかり難き所なり故ぞ唯〻
拜敬もてつとめ事なるべん

天狗の怪妙并狗賓餘の事

天狗の奇怪妙變は元人の知恐る〻事なり〻人智は
量ふべきなれども〻その種類を拾〻有事を考へ
國所りをりて所業を又多〻異りなるべしと思へる

愛り北義濃郡と郡武蔵郡東英濃賀茂郡恵那郡
色の天狗は主所業一条なり〻ぞと以へども大概同様の
怪をなすもの先山の本を伐時は神〻怒て入る者は
狗賓餘〻と云て〻山神に供へ人〻を祭り賞
のち本を伐べき始めは種〻の怪をなす中〻本を
伐事成難〻長〻所〻本を伐る山のごとは折〻
狗賓餘を〻〻齋こ仕也さ祭れば怪有〻本を伐事
なり〻〻如其怪怪〻〻〻一拍〻〻ざるべき多くは
和道具をとり又者は居る奇の頭を授九或は山の
大木大石を落して音をさせ甚多時は山をも崩し
裏をも授の勢をなる故小怪の内は甚恐るべき
也り狗賓餘を〻〻神を祭り雪〻俗をも〻

本と伐る事也或時濃州武儀郡志津野村の
三里ヶ山の麓村後ろの平山と伐り見ハ山と云程の所ゝ
中山道稲沢宿より
所ゝ古樹の霊ハ繁りて小松林ハ平山ゝ中ゝ天狗の住べき所ハ誰人も
思ハざるゆゑかの物賞餐をとゝせずゝゝ本と伐る
ゝゝ物ゝと寄合あ伐神ゝ皆振ふ斧の頭を
とゝもとりそを天狗出てりゝゝ道具を見ハ悉く
失せり見ゝハ中ゝゝハ仕事ゆゑどいざ物
賞餐をとゝべゝとゝゝ斧の家ゝに帰り支度して
餐を拵へ山神を祭りゝ侘をゝやゝ道具を
聖百ゝ年ゝ本を伐りゝ一年ゝ村のゝ私云
ものを予が下男ゝゝ聞ゝ所ゝ本と伐居る



美濃

ときき斧を振上げ木へ打付るに折ることなく
〳〵頭ばかり折れ〳〵ばかりと知ぬ〳〵て木へ打付
て後始〳〵頭をとり〳〵て事をなすこと不思議なりと云を
餘りなる事〳〵其時は松道具をい川のつるしに入れて
発ありかばかり云うちどもを物賞餘とて〳〵ひびねをば
発すなる笠をとり川〳〵の元の所へ戻り歪〳〵なり
とぞ云ふ〳〵はの根を常の事故きして
不審〳〵はせざるもどもし餘國の人の見物〳〵時は奇怪
ばかりの事〳〵
物賞餘とは時は先村内りふるて〳〵は物賞餘
とは何に事なるいへば老の男女大勢寄集りて
さ〳〵飯を漬〳〵樽をさすを振り飯〳〵すして串に

常に能く焼て味噌を附て先づ牧糖とよび六ッ木乃枝抔に差し清き所に供へ置て其後各々の傍に飽まで喰ひぬる事を祈り甚だ貪ぎ物りまど此餅を捧ると天狗集り来るとて村内の家々にては一切拵へざるなり同国苗木邑にては是を山小屋餅と云て大焼飯とるまて之又小くも拵て常に貴き焼するかをごへい餅と云ふ是（御幣餅の意なり別て貴しと云り）国所によまく製し方も名付方も異るべし是右に云塗餅の事まて今も江戸近在の山方まて八塗餅と云ぞ又文政七八年乃事なるが苗木領乃二ッ森山（城下より西北二里程乃所）の木を伐出さむ迚十月七日に山入しごへい餅を拵し山神へ供る事を忘れて皆々食ひしまりさて

夜に入ると大木を伐倒す音して一山荒出せし故漸くに心附て甲て餅を拵へ備へし無事なる事ありしよりも以来は右邑にては是を心ゆて大切に供ふる事と苗木侯の山奉行何某乃噺なり又越後の国蒲原郡蒲原郷の杣人に聞りしに山にて木を伐る時其一枝を折て夫の所に差て是を祭らざれバ大木倒れ八祟りあり其家有由之又越後の国出羽の国などにて八杣人のうちも山に入時八鰧魚と云魚を懐中して入なり大木を伐り難儀なる時是を供れば難なく安く伐得又猟人も終日猟して得物なき時八山乃神へ祈請して鰧魚の頭を少しみせければ獣を得せしめ給ふと云感應ありと

のそく金船と見せ来せんと祈ふく来る時を
速り感魚有事ぞ是ぞ中く軌ハ行とねと
うくを寄る時うくぎをバ感魚とかうくと云り

鏡魚と名付る異魚の事

我尾張の国知多郡横須賀四代官の下役名倉何某
文化年中国而立勘の時漁人の捕る魚を船全く鏡
つゞきの故鏡魚と名付あるを以漁りしくも
彼の魚捕る事ハ昔沖りうをきうをと熱神
海魚うくハ名をもちゐぬ魚を折節捕る事なん
ぐを以魚ハ主国の寄物うく者とれりのて国くよ
うく空行ーたる常ーを魚 右何某ハ能く会と 龍宮船と云
業記り鏡魚と云海百くを家係の勘あ房州浦うて

新つゞくゝゝゝ面長くして丸き物にて色ハ白
ゝゝゝ海につゞくゝゝゝまゝさ通りゝゝ
光り厚さ鏡の如き
五枚を重ねたるふ
ねの厚さ
ものゝ
かまいの
ごとくゝゝ目ハ
片面
ふ付
鰭ハ

大さ
世の如くゝ

横
の
面
付
背
ゝ
ゝ
ものゝ
見えず
朦朧
目
ゝゝゝ一寸
まゝさ
厚
鏡の如き
ものゝゝ背

捕えふかの〳〵江戸小田原町の者居へ持ちこむ
先ぐり〳〵き魚を全体九〳〵さ〳〵渡〳〵三尺半程
印〳〵めつぐ〳〵〳〵その名書〳〵つかうと云魚代名
り似たり虜つて又いうぐつの〳〵腹の下ゆ〳〵白〳〵
背〳〵腹の中寸長さ六尺半りの鱗背〳〵名八美よ
〳〵鹿の〳〵毒ぐ寄うかる魚有〳〵人〳〵を清して足れ
ぐ〳〵と名をとる人〳〵を形ち漬よ似たるを八漬魚
と〳〵云魚成やし〳〵皆人云あへいもぐ後よ陳海魚記志
を見るハ南方り漬魚を寄う腹毒漬つの〳〵と
ひり若し魚の毒ふ〳〵とあふやし云り陳海魚
記志の魚八名合れつ腹ろ去〳〵ぐ山龍魚私の漬魚ハ
大り遠ひる魚之物をぐ〳〵と先日日の漢う斯汀〳〵

雲〳〵後鑑の一助〳〵と

蛸薬師霊験の事

市谷谷町自性院東叡山の末寺なり住持を法号慈眼堂常願
後松の事なり住職なり居ながら病気なり公命阿院の
寺へ同居〳〵病と称〳〵居られなり公命阿院の
小性より山田忠三郎と云ふ今年天保九十三歳なり〳〵
出関年のなり不思議なる小疵出来なり住
出来場なり〳〵六月より出来より大小百余出来
大抵ハ豆粒なりと大〳〵小指の頭程の多く
出来〳〵甚見苦敷なりなる故公命院のもあらん
なれ目黒の蛸薬師ハ霊験所〳〵たり〳〵別〳〵疵の
事ハ祈るなり験〳〵有〳〵皆及びなり公命へ平癒の
願を願なり蛸と生涯なら物〳〵の疵なる
日〳〵薬師の真言を唱へ一日より共度〳〵唱へるべし
〳〵六月十八日より蛸薬師へ蛸の形を馬なる小さ
絵馬を絵の祈願なり〳〵来り日〳〵真言を共遍ハ
唱へ念じなるより不思議や朝日なり霜の消るごと
共一日共二日より〳〵ハ除程疵無なりなり〳〵者新さ
変なり別〳〵不思議なる事ハ共二日なるハ同〳〵さ事
出来〳〵甚ざ敷迫居同日〳〵壁共三日と二日まで
急なり〳〵彼共遍の真言を唱へなどして忘居る
なり共四日より〳〵疵無なり〳〵疵忽ち元のごと
盛なり成なり〳〵色ハ〳〵心付恐へ〳〵急ぎ真言
を唱へ薬師仏を拝もまでなる家なり〳〵と

癒ざるが故又念阿院世話やうまく七月の末日より藥師へ参詣し給馬とて拝み懇願とさせば爰ハ
色意り来言の数と稽日〳〵二百遍ばかり唱させて
り又遠り霊験者〳〵病頻りよ癖〳〵和の祈願
病の頼向〳〵出り〳〵願の方ら滅ぎる分出来しに
主因より十八日ハ病癒のうせるべき〳〵と根ら
落出〳〵〳〵成共二百三百ばかり〳〵ハ一ツも祈ぶ
平癒の〳〵〳〵ハ百七日より又張馬とこのぶ四礼
参詣つさせ〳〵ぞ拝〳〵神仏の霊験の新ら
事ハ事ハ色ぬ事ら〳〵主中よりこハ願ら
と〳〵念阿院異り出さと又忠三郎も酒の砂ら
廊より侍〳〵在〳〵面人ら〳〵吹行と

記〳〵ぬ此藥師仏ハ慈覚大師の作〳〵云伝へ〳〵天台宗
の城祇院〳〵云よ安置ら〳〵又寺ぶ和色よ言傳り
若村智山〳〵云當師者前の出と吹〳〵又ハ先年
世谷の法町一丁目より住居せ一時四丁に大工の某〳〵
云者者〳〵病験爰出来〳〵祈願ら〳〵ハ人も勧め
色と国〳〵色と目黒の蛸藥師へ蛸と一生断ら
〳〵願とうけ不日〳〵悪〳〵念ら御る
丈〳〵と年程と〳〵大坂高金〳〵ふ所りて蛸と
食故友達共のよハ色前ハ先頃病の出来る
〳〵貧困〳〵蛸藥師へ願と無蛸ハ一生断ら〳〵
ら〳〵ハ〳〵さや〳〵結むと大工言〳〵云ふ蛸
ら〳〵ハ〳〵蛸と汚ら〳〵り蛸ハ食ぶよ居てハ

不自由故蛸を蛸と見て八本者〳〵同じ事ゆえ
蛸〳〵弱〳〵と雷り蛸八生涯食まず〳〵云故畢
竟つゝの形〳〵を利益と忘るゝの〳〵ぞ云法
の荒云と吐散と故主席より居合をうる者たも
皆〳〵興と醒〳〵憎〳〵思ひ〳〵丈の病忽ち
元の如く出来ぬ〳〵絶倒とうせどと薬の毒
り思ひ者と形〳〵人〳〵挙〳〵薬師の所罰形ふ
事と恐〳〵指ざ〳〵笑ひぬ〳〵主後右の大工ハ如何
せ〳〵や丈の智山ハ右の町内と搗完せ〳〵故江の
事と安へぞとの事〳〵毎〳〵や亜事うぐ〳〵忘角
悪愛事や主法故事ハ歌と〳〵云ものよ河ぶ
うびり人の不義不法の事とうと席よハ居合ね

ゆうに〳〵別〳〵見物称せぬがようさハ面倒のうと
童蒙の人〳〵能心得亜ぬ〳〵抱出吐と吹〳〵或人ハ
外出原町の本撓源兵衛〳〵云者ハ把の者の吐り
大坂〳〵の事なるが出本撓仲間の者発病と変て
病氣平癒と祈へ祈ふそ〳〵石と断物して立ぬせ〳〵
〳〵り先ハ石ハ喰ぬ〳〵ものよ此さ〳〵バ断物り
〳〵〳〵と不自由ものう者〳〵不埒至極の
立預うぐ〳〵丈〳〵〳〵と祈ハ納文ま〳〵ませ〳〵と忽ち
病苦ハ全快せ〳〵〳〵御るにうと〳〵仮の中よ
小石の者〳〵ぐり〳〵嚙南さ〳〵ハ石〳〵と思ひつと
どもや仮〳〵共り喰へ〳〵り態〳〵喰るよあ〳〵
ぎと八祈の答めと拵うるべき理うるり忽ち

難病平癒〳〵遠り金牧〳〵分まうり〳〵とかり
毛ハ文政年間の事歟〳〵ゞ之者の名前を篤と
吟味〳〵至ふる今ハ忘れて〳〵弥り名ゝ事〳〵ゝ
又ハ信と吟〳〵何某の云ふ所の武人金毘羅大
権現より祈ふ事有〳〵利益と蒙むるよ生涯
鰻奥と断へべ〳〵と誓へり元感験有〳〵後年ハも
ゝ〳〵余波ゝ方へ客り行〳〵鰻と振舞れ
ゝ時断ある由をとゝ聞まゝ主人へ申〳〵黙止
難〳〵〳〵他〳〵外の物と断んと〳〵即座より洗
に漱〳〵金毘羅宮より祈念〳〵先よハ鰻成
断物〳〵ゝ也〳〵今黙止難き事よろゝ〳〵ま〳〵断
あと鰻よ〳〵下さるべ〳〵亘〳〵酒吏なさせのへと

怒り祈念〳〵亜〳〵ゝ敵ゝ何の障りとかり
〳〵を又武方〳〵鰻と振舞れ〳〵ふり今度ハ別
物〳〵〳〵断ハ鰻と断〳〵〳〵事ハ有ふ
外のものより別器へ〳〵と主人へ勧る故御ハ日
りの者物よ断〳〵〳〵又金毘羅宮より余波の者
澤と前へ〳〵祈念〳〵今度ハ虎と断ハよ〳〵
さん〳〵雲〳〵ゝ怪〳〵極と〳〵武形よゆさて
何心〳〵黄猴と〳〵ゝ思〳〵ゝ嬉〳〵ゝと
悪〳〵振舞〳〵余り不思波り思〳〵能見ハ
黄猴の横振り十二支と焼付〳〵ふゞ虎の黄猴
と嘗へ〳〵ふり〳〵〳〵の事〳〵〳〵何ハ〳〵今〳〵日
振舞ふ祈祷ふり情厚〳〵ハ面倒の事也

頼馬の事

馬より頼馬と云病ありて乗死すれば尾張養濃邊
りにハ是をギバと云鹿をかるゝと云古伝を
ギバと云ハ一種の麓物有て馬の鼻より入て
腹より出れバ馬忽ち斃と云傳る事之手ゝ有事
麓物有り遠ひ〻〻思ひ〻〻馬術熟練の人々
り尋ねよ多くハ馬の病なりと〻〻麓有事を
ある人ゝ御るよ今怪成事を吹まゝり書付
為ス

天保三年壬辰予ゝ沖より抱亟〻下男吉松ハ濃別武
州郡志津野村の百姓也
此吉松ハ九歳より馬を好ゝ今年二十五歳まで

馬方を渡世〻〻馬の事ハ即〻切着之比着云
ギバ〻〻云ハ虚う實うハ存ぜ〻ぬ之近江の國
大津の東町の獄多の浪死〻〻ギバ〻〻馬と斃
せ〻也古伝のまゝ伝り口発り〻〻云り物ゝを形ちを
見〻〻知り居〻〻や〻同り存居り〻〻善〻〻ハ
如何成形ちのものゝやと問よ出の物ゝ〻〻
の小さ馬り赤ゝ〻〻程〻〻紙の衣被と云〻
金の襟帽と冠り紙巻のきれ〻〻ふやうに天ゝ
と浮ぶ〻〻馬ハ忽喰綱股綱〻〻と云と物貪とよげ
共事ゝ〻〻ぬ声〻〻嘶さゝ〻共時ギバの赤ゝ
妖馬の赤と我るの口の方へあ〻〻涙と我馬の
耳より鬣の方へ踏〻〻馬の面りゝと懐抱ゝ

此時彼ギバの怪女必ずの古りて年ふる婆ハ
消失ぬ　さてバ馬ハ右の方へ三度廻りて鬱金
の支度り所死もとる物よ四方に不案内の馬士を
多くハかけらもて仕舞ぬ此故り常に馬士
寸法とを為て居ぬ此馬士寸法ぬハ
羽織ものと稽古ものと武ハ風呂敷
又を薄圓蔦やうの何ものと衣被ものよ
帯かり羽織居りとぬ毛ハギバの所ざのぬて
ぬ毛ハギバ室より来りて馬の頭り乳付
たるものにと乳居て彼馬士寸法の右の神社
つとぬぎたの神ハ泥へ捨せて彼魔物
りて馬の首よかぶせて馬ハ右へ廻んとすを

馬の首と捕て左へ向て来る尾のこの脊筋よ
完口度ハ百舎の毛へ針とおりへバ支切て郎ぬ
是と為針て喝ぬかの魔物馬の鼻へ入て虎の
穴へ出ぬて中を事故左へ廻せて隠も遠ひて
又をの鼻へ出て仍ぬ傳へ出ども時ハ馬と
教て入ぬ中さぬて関章居る故鼻る出て
仍西を見ぬる者ハ仍ぬ中さて言て
此成事仍り
扨又彼ギバよ武度逃るやて同よ二度逃ぬと
言へを魔物て云ハ唯一ものと又武つとを物ろ
量り難て始り逃るぬ顔色や後よ逃ぬる
顔多て同て拍うりや負て入るきと尋試るよ

吏をよハ覚えを四座のしゝは去れば〳〵究竟怪し覚
えをゆま〳〵今一度進りへハ二疋う一疋う見換じハ
仕〳〵ぶゝ〳〵疑〳〵言〳〵之東は松ハまぐ精神
肥成着と先ひり〳〵主方ハ〳〵う〳〵ぶゝ他の着をギバな
を〳〵ふ着ま〳〵や〳〵問り皆濃〳〵色を色りは
濃ゞ見〳〵ふ者も問ゞ〳〵のよ〳〵玉出多の麻絹の
大さの馬り雲〳〵猩〳〵紬ハ物〳〵多とう〳〵る
衣後〳〵四社は紬編細の多〳〵ハ麁ひゆは行ゑも
女雛のめ〳〵櫻路と冠り居りは白多ハ馬よ混り
てゆけりは栗毛麻毛の駒と無〳〵ハ一〳〵びも形り
ゆ〳〵ぶゝは馬と雪り紬ハ着ハ半り馬の生計り
仕は敬九十里は方わゞの馬ハ麦ハ毛白ハ問り

文晁筆曹翁

逆り當所りやい私のかけらを無りやい馬を白
月毛〳〵栅目馬り口産ゆ〳〵ゆへり
又他の馬とうけ〳〵而と見うふう〳〵同り近村の
へ口の野よ馬の産とと多る所口産ゆ馬つ六十も
者〳〵産后〳〵居やいとと二三十間計り向り
驚ゞ有〳〵馬頻りり鳴さきり〳〵と口てやい
何ま〳〵あれ馬が何のやう的る事とと多るやい
留を的〳〵風とたふとめ〳〵斃を死やい馬士
ど〳〵と疑消ゑを仕方的〳〵伯樂と馬醫の疑付
〳〵ギバつけ〳〵也と云とと多ぬり又債つゝま
同じ者振り口玉〳〵斃やいま〳〵毛日ハ産を
実ゆ〳〵皆〳〵顔文書〳〵ゆり馬と牽向りやい

此時の馬を白毛〳〵白毛〳〵と申伝へ毛ハ今る
七年以前の事なり四度いへり　文政九年
此時驚〳〵二疋の馬のあり無馬士中甚和〳〵
人の支わざ明石の地蔵尊二體と造り野中
り安置かゝり物るり推好ることうこの
尊體り馬の病の風を勉るり霊験いちしるく
今ハ百度余りあるこのも多く育て皆
利益と蒙る事と我尊常の石工の彫ものか
新像うまでと霊験ハ速りもの神へ帰りの人
事〳〵ひんえうと
又人の事ゆく馬にギバの勉る所と見〳〵や〳〵問よ
そもそも一度見今りへた此ギバ麗物故馬とひさ

歌川
豊山画

居い着の用よりらぐ〳〵ハ見えやさぐ遠先よ並びく
馬と乗行い〳〵と他の馬士よりそうん〳〵ぬ〳〵中乗に
ひ社い或時関〳〵波阜この間あ〳〵び〳〵ぞとろと
十五疋ばを三乗行いり七疋目の馬白馬そぎバ
熱けやいひ馬士ハ不案内ゆ〳〵我ホが馬がひんか
乗をと〳〵〳〵帰〳〵天うり変ひふ着が馬の頭の
所へ乗り〳〵ハ〳〵云と前後の馬士共の切着するが
関〳〵丈ハギバジヤ早〳〵馬の首をたりへむりり
乗ひっせるぐ口〳〵よ罵りかけうり〳〵馬の顔へ
ま縄を震ハと有或ハ口をたりへ元着をそ乗中
よりと格別乗ひふ馬士強あり〳〵乗りかの
百舎るよ計をおまづよ〳〵曲計をおうり死ぬ〳〵

ゆゆしハ所〻ゝ丈ゆゆ馬ハ脚りゆゆ色ハ馬士ゞ
不案内故前後の馬士ゞと強ゝ〻〻〻〻仮漂ゆ〻
餘程ゆ間ゆゆ〻〻故間ゆゆと接りりへゞゞ行事も
所〻〻危絶とのゞ色ゆゆ元来ハ脚変事故ゆゆハ
色〻ふ事ゆゆ四度ゆ〻〻〻〻〻〻

又俗りゆゆハ式ギバゆゆ〻ハ〻つの事ゆ〻〻〻大津の
東町ゆゆ所ハ穢多町ゆ〻〻四度りゆ〻〻式ゆ〻ゆ老爺
ゆ〻ふ一人の娘ゆ所り〻〻〻〻鬼馬ゆ〻色バ穢業
仮故仮娘ギバゆ〻馬ゆ〻〻〻歩行ゆ中事ゆ四度ゆ
爺故娘ゆ〻り　小日爺ゆ大津東町ゆ仕合〻〻ゆ〻深迷色
りへゞ我所ゆ馬〻〻心得掛ゆ中ゆゆ中伝へりて今も
〻ふ娘ゆハ深ゆ事ゆ四度ゆゆ〻せ〻〻御〻バ

その娘ゆゆ中居〻ふ馬りギバゆ掛〻〻ハ〻〻〻と
問ゆり爺ハ〻ゞりゆ〻〻ん松事〻ふ馬ゆハ式娘ゆハ
仕居ゆ〻ゞ〻〻言ゆり

今関東〻〻〻ハ此娘ゆゆ〻〻ふ馬ゆ見ゞ名吉
屋色ハ十ゆハ九ハ式娘ゆ西国北国筋ハ〻ゞゆ
ゆゞ〻〻実東〻〻〻ハ彼馬士ゆ繼ゆ色〻ふゆ
一向り見ゞ義濃尾張色ゆ馬士ハ必ゞ〻り
常ゆ〻〻〻ゆゆ穢居ゆ〻り

右吉松ゆ中所ハ實り正変事ゆ予ゆ〻ゆ考ゆり
国〻〻り所〻〻ゆ一松〻〻〻ゞゆ〻ゆ牧浦国ゆ老伯
楽〻国汀変度事ゆり
又一年濃州多藝郡明徳村養老〻〻道程東ゆの方言須竹ゞ鼻ゆゞの近色〻り前〻〻

志津の村くハ十里余仲の方なり　捨松といへ者ことに下男に抱亀ゝりこの者と又馬士ことにたせ者ゝ者ゝゝゝゝうぞギバの事を要安尋ねしに捨松ハ中ゝゝ松毬の切者り毫あゝゝゝゝゝゝ言又明ゝゝゝりギバと云ハ白毫のわさ出とり事ゝゝ伯樂ハ中せごと雖と惟ゝゝゝゝゝゝ中ゝのハ影ゝゝぞれ曩ゝへゝ廃へぬるとゝゝゝゝゝ白毫ハ黄のうち胃より尾ことの事ゝて又六月ハかゝゝ多ゝ中ゝ七月ゝゝゝと秋風ゝゝゝけゝさぞ四歳の馬と多ゝゝけハ歳迄ハ切者ゝれ文ゝ老馬ハ一切掛ゝさぞ女馬とかけゝさぞれ良馬毬多ゝかけゝれ伯樂のゝよハ朝より時ゝ夕七ッ時過り掛ゝふハゝさ事ゝゝ毛色ハ蘆毛多ゝ

黒麻毛栃ととかけゝゝゝれゝゝ云へり　茶ゝ云志津此村白毛粕毛駿連淡鹿の類ゝゝゝ必白色の馬り深る事ゝゝ鼠若松同ゝゝ事ゝゝゝ事ゝゝ事の遠ハ事ゝり　僕十余里の陽ゝゝ

熱ゝゝゝ余国ゝゝかけゝゝハ栗毛麻毛の類ことゝゝ吹及べゝ金ゝ所ゝゝゝゝ遠ゝ事ゝ黄ゝゝり山明徳村色ゝゝハ慌ゝまれゝゝを霜ゝゝゝ多ゝゝかけゝゝ田畑ゝゝかけゝハかゝゝ廃ゝゝ掛ゝる事ハゝゝゝ地捨松ゝ見ゝ不ゝゝゝけらまゝるハ明徳野ゝゝ牡丹蘆毛の馬昨死せりギバのうけゝゝゝゝゝ伯樂のひゝゝ毫ハ白ゝゝに驚ゝりゝいへり如ギバと避ふ法ハゝゝゝゝ同よ大垣ゝり出ゝ守りの本札有是を馬り無ゝバギバを漆ゝゝゝ近来ゝ多ゝ掛ゝれ山外よハ如何ゝも

のゞふ所をさやうハ兼〳〵ごを活りきり
手岐より野別總別色〳〵〳〵ハギバの就〳〵ふりハ
必馬の耳と切〳〵朗る事〳〵云馬の耳ハ急所〳〵〳〵支故馬の紀と
事〳〵又馬の平首と切〳〵朗る地と〳〵〳〵云り武別
多賀新屋新屋色〳〵江戸へ出ふ切着成馬士たり
尋ふり彼色〳〵〳〵も頼馬〳〵云る附ハ馬の耳と
切り刃物ふ多時〳〵雲切〳〵〳〵朗る事〳〵〳〵切事
生〳〵時ハ朗〳〵〳〵〳〵〳〵色色月ハ七八
月頃迄の間の事〳〵〳〵晴の日〳〵〳〵〳〵〳〵
時〳〵村雲抜出ふ日よハ〳〵り〳〵云又馬と南向り
紫ざ色で彼色忘るゝの中伝へ〳〵心〳〵
馬士ハ一切南向りハ紫ざ色ざふ事と我〳〵かの

焼物の目よさへぐふ〳〵ハ〳〵〳〵馬ハ新て掉の
〳〵〳〵〳〵云り大国小英国〳〵様〳〵成事〳〵〳〵
〳〵り

予武高士り玉言秘密の法也〳〵〳〵授り〳〵ふは
敬〳〵〳〵〳〵焼書と書〳〵馬の鼻のあ〳〵と〳〵お拂〳〵
襲と漆〳〵法有　ギバハ馬の鼻　竹策の三十六會よ表
〳〵〳〵三十六節有策〳〵でハ切強〳〵〳〵の傳〳〵〳〵
理と極〳〵ふ事〳〵〳〵傷〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
巧拔り多〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵〳〵
〳〵〳〵ハ間よ合ねとの〳〵歳度と事に色〳〵〳〵〳〵
得るよ〳〵〳〵〳〵ハ真の切着〳〵ハ〳〵〳〵〳〵〳〵
又伽羅子演篇　寛文年間の下カ　り白尾濃後遠参別の間り

掖馬風〳〵と云ふ者里人或ハうまに赤或ハ馬我
牽〳〵ゆに旋風おこり〳〵ゆと巻籠〳〵九〳〵
馬の前りたちめぐり車の端の如くぐるぐ如〳〵
り玉旋風大なる成馬のこりめぐるとハ馬の驚ぎ〳〵
〳〵玉驚の中に細き糸の如く色赤き光り
是迄馬類りよ掉立いだひ跳〳〵さしうちに驚き
死〳〵風其時敵矢〳〵流ゆ如何成とのく業〳〵
知人ゆ若旋風馬の上り震ハ時り刀とぬきて
馬のうへと拝ひ光明真言と唱ふるとき玉風散
失〳〵馬と恙ゆ掖馬風〳〵ゆ〳〵〳〵〳〵
間のふギバの事〳〵見へうり是を以〳〵見る時ハ
尾濃後遠参の間〳〵よりぐるゆ事ゆ絶た前ゆ云

恙濃ゆ〳〵柳ゆ変怪のものハ旋風よハうぐ〳〵ぬ事
〳〵多ゆ色ゆ種類の多きものや其後又遠列
演松のものと伊勢りの色〳〵りの者り怪のこと
尋ゆに史ハギバ〳〵ハゆ〳〵ダイバとゆいて柳ると
唱ゆハ彼色〳〵ハ所定り居ゆハゆ演松より
登り方八丁縄ゆ〳〵云松原とゆ念仏堂とゆ
建場の所ゆ一里塚ゆ此所ゆ〳〵ハ一年よ
二三度とかけゆハ又演松前より方僅三町程の
松原とゆ天神町〳〵云建場の所ゆ一里塚
此程ハ最の念仏堂ゆ此所ゆ〳〵一年よハ一二度ハ必
かけゆハ又演松より氣賀海道半道程よあるかぐ
る町〳〵云と伊勢ゆ山の禁小松原の所ゆ〳〵もかけ

ものハ此三ツなりかぎりなく掛ものハ田畑又ハ作道などにて
みな掛るなを嗅やさしく同じ海道なくを右場所
の外みなハ掛ものさまざまダイバかけハ時ハ馬爲りて驚る
となりハ私存居ハ馬ハ栗毛鹿毛なとこのけらまた
ものハ漢松也り白毛乃馬ハ一疋を居かさせてと語り
なり國所よりくかしづ振合遠ひさり
予此頽馬の事あしく知り明めんと思ひて
馬醫ハ又なり馬術の師家老功の馬乗其他
馬に携る人くり累年懇ろに尋ねども其説
區なり亦一定なき家傳を嗅出さず從欲ま抱こと
なし多くハ自意所智を以て各自の了簡ま
うせの善をなりまく感伏すなれ程の事をかし

其内同友新沢等（實名忠雄馬術ハ随心流にして門弟を多く馬乃事よハ甚心を配り能学びける英哲なり）
の説りハ頽馬といへ馬の卒死するを云之馬かさ
ふしと云心也頽の字かくふしくことと崩るゝことを
おつるとを訓むなり抑ダイバの説區々也一説
大魔り記ると神雲中よ形る時ハ馬眼を塞
進む足をもむ早むまバ鞍下落着ずて倒れ
馬乃如くみしく轡を兼ずて總身直立亦よ精神
乱まて死まるなりと云昔天文五年夏六月将
軍家（足利十二代将軍義晴公の代なり）畠山修理大夫義忠を以て
愛宕山へ代参の使を遣さるゝ下向の折から下り
松の辺にて一女忽然と来り畠山が宗馬乃轡を
執りて引くと見しく馬忽ち倒れ死してり

と云り此ダイバと云ハ神の魔障のなす病なりと
斎藤道三易の記り見えたり其餘頽馬の殺数多
有所ありて汁へ難しとも此亀山義哉が遺ひ
たりし一女と吉松が見たる不の怪女とハよく
似たり是等の事ハ諸国遊歴して尋明しめ
垂しく人くふも心得垂せ設事也文盲人傳
ふくハ吹汀し難き業也我国りよまくハ
此怪よ遺ふ所も多人さに我国名古屋りしくハ
甚稀なる事しりえたり

何某馬りし常對るよ馬をく薬ふゆえ業也しぬ
其所へ来ふしく又く馬をまぐるふ故遠し
餘の道を示無りくりと論るりと馬の氣と被る八のしくと業返して
来りてギバがかけく馬も卒死せし是ハ汶化年中の事人川澄何某ハ武道
の藝よハ委しく人をかく馬を好みかく印者盛人わりかく馬の
しく此怪を避るもと藝の徳故と覚ゆふまくあるまし深あるくぬ

名古屋杉の町の東高岳院へ
行所り徳盛坂有式所へ川澄

其外諸国の者ニ尋ねけれども更に此怪を知らざる
国もありと見えたり漢土にても是ハ馬部を
集めたる本草有馬部とハ馬の災害を云部也
縮めて云ふ頽馬などの類かし馬事義識にも見え
たり又本草の今按に頽馬とハ馬の所死するに
馬経大全に馬の卒死ハ心肝絶して有腑を返りとも云大腸の腑へ
病也
外邪を受て急死するなどの諸書にあり皆馬の傷寒なり
右八病に違ふし御するに彼魔物あり魅魔されて
卒死するなど頽馬病にて卒死すると混じて
魔物にて頽馬の名を負はせしなるべしそハいの
ふもなき病にして療治ハ叶ふべからず欲
魔物によるハ療治ハ有まじけれども避方ハ有るべし
あたりへ出ても法なく
大道の木れかなかり
馬を畜ふ輩の者ハ兼て心得

亟屈くゝ事くゝ凡そ麗物より掛らまくゝ即死なり
そゝふ馬ハ馬の完閑より外の方へ走き枝と成くゝ
実出くゝふぐくゝ閑脱もふ事くゝ彼麗物馬よりも
掛出るゝゝ云伝流を虚りのゝぬ事ゝ成り老浅
遠列の方言り類馬風くゝ云ハ高ぐ南りくゝる事を
号る西洲麗害の物ゝ閑くゝ即死もる馬の肛つ
ハ彼脱もふ成ぐ閑まり毛長思の外
心と閑ひくゝ知りそふ人ゝ故ふり家ゝ思ら
くゝ彼河童ゞ人と成くゝ肛門を掛くゝ閑日の傷
りくゝ閑ゞ水死ゝくゝ河童の形るゝ成ぐゝ
肛門の閑脱せざふぐくゝ成くゝ思へり如何や
右松の見へふ矣治傷りくゝ死そふ馬の肛門ハ
如何ゝ成くゝや閑亟ぐゝ成くゝハ死り多くゝ

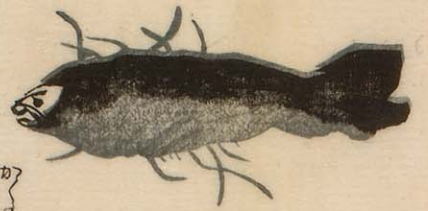
蔦蒲の根奥と化そふ事

板底枝意廣長ハ去佐家の四法師ゝ成りそ男枝舟未
ゝ年のくゝ文政七年甲申六月の事ゝ成り河原くん
神地りそふ拘河くゝ神と尊ふ成り椽の下り
古き神あり百出くゝ見そバ板菖蒲雷の下など
枝くゝあふゞ皆枯そくゝ去と乾ふくゝそくゝとよ
赤明ゝそふよそ去の中より奥の形ちくゝる蔦蒲
ふり敷りんそバ菖蒲の根の蠢めくゝ成り枝舟大り
驚きくゝ又と呼びぬ時枝意ハ朝飯と喰くゝ居く
そ出くゝそぐくゝ見るりあやめの根奥の形ちと
成くゝ動くゝ故水の中へ入さくゝ見るりまづ成る

出来てあるいは雲間より尾鰭をひらめかせて一時だうりの間より金色の奥深く水中を潜ぐりまわる鯉の色ありて
かすかに金色をなしかびたるうり山事忍人口の膾炙しかく見るあるかを人をもて歴代の史籍の考へより龍ハ化変化
しかく繁昌するのこと彼奥龍種なる時日を待風雨を起し昇天なきんとするべきなれ共ハ
葉の一の張を有バ虚空水中へ放ちやるかを我造
しめしかく唱るもしかバ面ぐ矢慶場へ放ちしと云
山岳ハ崩れ崖ハ崩れる上又山化をなる石の石根を
植意ぐ常ぐ言葉をもて書意をうかとなる世を家の
かり得ふまく書面しかく遠いぬ根ハ騰寫ちう
意ぬ世ハ根義事をもてのかり

面白ク月十九日ニ新ニ出ル
卯植ル物の枯ハあるこハきよ
あるや死ぬ中きのしこと
こと云事あるなり

菖蒲の
うり
まり
ハきよ
魂ある



菖蒲根

一ノ二十八